

大山喬平・三枝暁子編『古代・中世の地域社会』誤植について

『古代・中世の地域社会』の出荷されたものの一部に誤植がございました。495頁の黄色マーカー部に関係のない文章が混入されています。

お手持ちの書籍が該当される方は、思文閣出版

TEL (075-533-6860)

FAX (075-531-0009)

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

までご連絡くださいませ。

正しい商品と交換させていただきます。

ただし、勝手ながら交換期限は

2019年9月末日といたします。

この度は大変ご迷惑をおかけしました。

今後とも何卒よろしくお願い致します。

思文閣出版

和名抄郷の持統性と自然頭首工（海老澤）

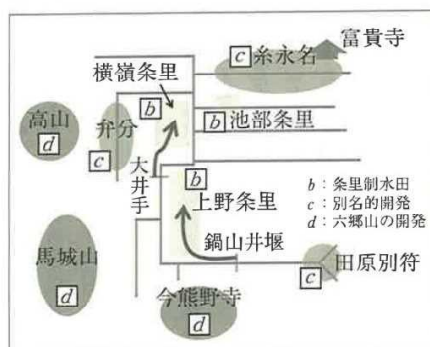


図5 古代末期の状況

びその自然条件を考えれば、鍋山井堰が幕府に忠誠を誓う御家人が、緊急事態時に鎌倉に向かうために整備された街道ですが、約700年もの年月が経過し、その姿が消えつつあります。近年、地域自治会が主体となって鎌倉街道の調査及び復元を目指しています。田染郷において基幹的な位置を有していたことは間違いない。考古学的調査の結果から、八世紀半ば以降、まず鍋山井堰からの給水により新たな水田が開かれていったものである。より規模の大きな大井手の水田が開かれるのは九世紀から一〇世紀にかけてのことと思われる。

結凝灰岩の岩盤があり、これに依拠するもので、東側には岩盤がなく、堰の幅を広く取らねばならないこともあって頭首工としての安定性では鍋山井堰に一步ゆずる。さらに給水量の問題も大きい。近世のことではあるが、宝暦一二年五月廿三日の覚書¹²⁾があり、大庄屋の指図によって大井手の用水については「朝五ツ之上刻中村江受取、同五ツ下刻横嶺村へ渡候」という番水の規定があった。他に関連する史料はなく、詳細は不明であるが、中村・横嶺村が一日のうちに使用できる時間は一時間に制限されていた。規模は大きいとその機能を十分に発揮させることは困難をともなうものであった。

豊後国大田文にみえる本郷四〇町の灌漑においては桂川本流にある二つの頭首工が重要な位置を占めたことは確実である(図5)。一般に水利権は上流に優先権があること、およ